駅から広がるまちの未来

― 新たなにぎわいを語る ―

市では、JR裾野駅とJR岩波駅を核に、コンパクトなまちづくりを進めています。拠点整備が節目を迎える中、世代を超えたにぎわいづくりと暮らしやすさの向上に取り組んでいます。まちが新たな転機を迎える中、変わりゆく裾野の未来を語り合います。

企業や研究の拠点として ふさわしいまちづくり

市長▶今、裾野駅と岩波駅の両駅を中心としたまちづくりを進めています。裾野駅西土地区画整理事業は、平成の初めに構想が生まれ、平成９年に都市計画決定、平成15年に事業計画決定と、すでに40年近い時間をかけて進めてきました。本来は平成29年に完了する予定でしたが、見直しを行い、現在は令和12年までの事業期間としています。進捗率はおよそ60%。私で４代目の「この事業を預かる市長」になりますので、私の世代で必ず完了させるという責任を強く感じています。ただ、拙速に終わらせれば良いわけではありません。時代に合ったものと

し、市民の皆さんに「やって良かった」と思っていただける完成形を目指さなければなりません。そこで最近は、土地区画整理事業に「にぎわい」という視点を加え、市が土地を集約したエリアを新たな拠点として位置付け、令和７年の秋から民間デベロッパーに向けたプロポーザルを行う段階まできています。岩波駅周辺については、トヨタ・ウーブン・シティの実証実験の開始を受け、岩波駅とウーブン・シティの間を公園のような駅前空間として整備を進めています。歩道などもしっかり整え、安全な交通空間を確保しつつ、企業や研究の拠点としてふさわしい北部の新しい顔づくりを進めているところです。

司会▶裾野駅周辺は、まちの「顔」となる場所です。市長として、どんな空間になってほしいと考えていますか。

市長▶当初の計画人口は約1,200人です。駅前に人が住み、商業の核となる施設があり、公共交通の結節点として機能することで、経済も動きます。裾野市は立地適正化計画の中で、裾野駅と岩波駅二つの拠点の特色を生かした「ダイヤモンド富士型」のまちづくりを掲げています。両駅を交通のハブとして位置付けながら、駅前をまちの中核としてしっかり育てていきたいと考えています。

空き家や空き地を活用しいかに「混ぜる」か

司会▶全国各地でまちづくりに携わってこられた後藤先生の外から見た裾野市の印象はいかがですか。

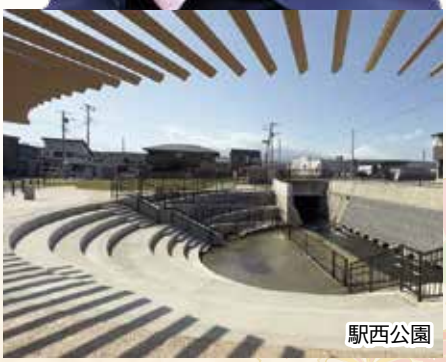
後藤▶全国の現場を訪問して思うことは、過疎に苦しむ村には今でも地域自治の伝統が息づいていますが、一方で、地方都市の中心市街地と郊外部が大きな課題を抱えているということです。裾野市を歩いてみて感じたのは、日本の都市が抱えているこれら二つの課題が重なっているということです。だからこそ、ここで問題を解決する道筋を見出すことができれば、日本中に応用できるモデルになる可能性があると感じました。人口減少が進む「縮退社会」では、空き地や空き家といった「空隙（くうげき）」があちこちに発生しています。この「空隙（くうげき）」を「原石が眠る場所」としてポジティブに評価して、公共的な役割を新たに与えていくことが大切だと考えています。駅西公園のビアガーデンの取り組みのように公共空間として整備したところを活用することはもちろん良いことですが、空き家や空き地をみんなの空間として使い込んでいくことが、これからのにぎわいづくりの大きなポイントになるでしょう。近代都市計画は用途で空間を分け、効率良く課題を解決する施策を当てはめてきました。近代の方法論は「分ける」でした。しかし、現代は「分ける」という方法論ではなく、いかに「混ぜる」かが重要な方法論です。空き家や空き地といった空隙は、混ぜるときに重要な役割を果たします。異なるリソースを分かち合うことが、これからのにぎわいづくりには必要になってくると思います。行政には一歩距離をおいて、市民の活動を温かく見守るぐらいの構えが求められると思います。

土地区画整理事業に「にぎわい」という視点を。

裾野市長 村田 悠

裾野駅前

岩波駅前


駅西公園

観光と地域経済から見た裾野の可能性

司会▶観光の視点からはいかがですか。

裾野は「つなぎ役」になれると思うんです。

裾野市観光協会 会長 土屋 祐一

土屋▶今はSNSで「行きたい場所」を探す時代ですので、その時々のトレンドに合った仕掛けが駅周辺にも必要だと感じています。裾野には、富士山の裾野ならではの絶景スポットがいくつもあり、すでにSNSにもたくさん投稿されています。裾野駅の周辺に、カフェや飲食店、コンビニなど、来た人がちょっと一息つける場所が広がっていけば「裾野へ行ってみよう」という方が確実に増えると思います。岩波駅については、ウーブン・シティの実証実験が始まったばかりで、これから新しい企業や研究者の方が増えていくことが期待されます。岩波駅周辺にはビジネス利用もできる宿泊施設などが増えることでにぎわいが増してくる。裾野駅周辺は観光の玄関口として魅力を高めていく。そんな「役割分担のある二つの駅」が、結果としてまち全体のにぎわいにつながるのかなと感じています。

司会▶一方で、裾野は「通過されてしまうまち」と言われることもあります。箱根、伊豆、御殿場プレミアム・アウトレット、富士スピードウェイなど、周囲には強い観光資源がありますが、まだまだ活用できていないのが現状です。

土屋▶だからこそ、裾野は「つなぎ役」になれると思うんです。例えば、これまで富士スピードウェイに行くときは御殿場インターを使う方が多かったですが、「裾野ICで降りて、裾野でちょっと遊んでから富士スピードウェイへ」「帰りに裾野でお土産を買ってから高速に乗る」という流れを、仕組みとしてつくることができるはずです。裾野を起点にアウトレットや箱根、伊豆を巡れるような仕組みを整えていければ、「通り過ぎるまち」から変わっていくのではないでしょうか。

司会▶では、地域経済の立場からはいかがですか。

■ 裾野駅西土地区画整理事業（事業期間：平成14年度～令和11年度）

商業・居住環境、交通機能、防災面など多くの課題を抱える裾野駅周辺地区において、都市計画道路や区画道路網、公園、水路などの公共施設の整備・改善を面的に進めるとともに、宅地利用の促進を図ります。併せて、豊かな自然と魅力的な環境を生かした市民の交流拠点を創造し、裾野市の玄関口にふさわしい中心市街地の形成を目指します。

【令和７年度事業】

裾野駅周辺のにぎわい拠点の整備を推進

駅前広場などの整備を推進

【令和８年度事業予定】

にぎわい拠点を官民連携で整備

都市再生整備計画を策定し、歩行者環境などを整備

中川▶昼のにぎわいと夜のにぎわいは違うと思っています。裾野駅周辺では、子育て世代から高齢者まで幅広く利用できる賑わい施設の整備が進んでいますが、それと同時に、駅前から伸びるストリート全体の景観づくりも必要です。裾野は、川越のような歴史的な蔵の町並みがあるわけではありません。だからこそ、これから「裾野らしい景観」が必要だと思います。商工会のイベントのフェスタすその では「温故知新」をテーマにしましたが、昔の裾野駅周辺の写真を見ると、とても味わいのある風景が残っています。まちづくりは

個々の商店だけでは厳しい部分があるので、行政やデベロッパーなどと一緒になって進めて行きたいです。駅を降りた瞬間に「うわっ」と思ってもらえるよ感動するような景観も重要です。「岩波駅で降りると、そこは富士山の世界だった」みたいな感じの駅前がいいですね。

人が混ざり合い、にぎわいが育つまちへ

司会▶にぎわいには市外からの集客も大切ですが住んでいる人にも感じてもらい、市への愛着を深めてもらうことも大切です。

後藤▶能登半島地震で被害を受けた輪島市で、高齢者施設を運営している「カブーレ」という施設があるのですが、そこではまちの中に高齢者施設を点在させて、歩いて巡る「ごちゃ混ぜ型」の施設配置を実践しています。裾野駅の区画整理エリアにも高齢者福祉施設や学童保育などの施設に入ってもらい、高齢者と子どもが交流する

駅を降りた瞬間に「うわっ」と思ってもらいたい。

裾野市商工会 会長
中川 好大

■ 岩波駅周辺整備事業（短期計画期間：令和５年度～令和９年度）

岩波の地域資源とトヨタ・ウーブン・シティなどの周辺企業が持つ最先端技術を「つなげる」ことで皆がワクワクし、20年後の未来を創造できるまちづくりを目指します。まちの将来像は「岩波らしい自然と未来技術でつながるまち」です。この将来像を実現することによって、当地区から北部地域、裾野市全域へとその効果を波及させていきます。

【令和７年度事業】
御宿第一歩道橋新設工事完成、緑道への工事着手
用地買収の目途立て

【令和８年度事業予定】
市道１-12号線、駅前広場などの工事着手
にぎわい施設検討整備

駅西公園でのビアガーデン

郷土演劇いのちの用水

富士山すその阿波おどり

のもいいですね。空き家を利用して、腕に自信のある市民が趣味の延長で焙煎コーヒーを振る舞うようなカフェを開いて、そこがサードプレイス（※１）のようなみんなの溜まり場になって、コミュニティが育っていくといいですね。

※１自宅や職場以外のリラックスできる場所

中川▶裾野ブランドの中にも、そういう事業者もいます。市内の特産物を使いながら食文化を作っている事業者もいるので、裾野ブランドを通じてチャレンジできる人を見つけていくのも良いと思います。

市長▶駅西公園のビアガーデンには、多様な人たちが集まってくれました。会社帰りの方、金融機関の職員、役所の職員、出店する事業者、その家族、子どもから高齢者まで、本当にいろいろな人たちが一つの空間で楽しんでいたと思います。単に「人が多い」という意味の賑わいではなく、世代も立場も混ざり合ったバランスの良い賑わいが、あの場所には生まれていました。イベントを通じて、「こんなお店があるんだ」「この人たちがこんなチャレンジをしているんだ」と市民に知ってもらう場を増やしていくことは、とても大事だと感じました。公園を整備して良かったと心から思えた瞬間でした。

後藤▶イベントとお祭りは違います。お祭りは毎年開催する神事が本質ですが、イベントは年中行事ではなく、「１回限り」くらいに考えた方が良いと思っています。惰性で続けていると、準備に関わる人たちの熱意を奪ってしまいます。イベントは明確な目的を掲げて実施することが大切で、それを達成するための実証実験のようなものです。

土屋▶続けることはすごく大変です。参加する人はいつも同じということもあるので、今までと違う人を巻き込んでいく必要性は感じます。イベントは主催する側の負担はありますが、終わった後の達成感は大きく、「次はこうしよう」という前向きな意欲も生まれます。持続可能なものにするため、どんどん省力化も進んでいます。

後藤▶達成感の共有は、人と人との関係を深めていきます。そこに世代や性別を超えて集結していくような多様性を担保する仕組みがあるといいと思います。それがないと一つのグループに集約されてしまいがちで、閉じた社会における関係の粘着性は強まるかもしれませんが、それが強まれば強まるほど周囲との関係が脆弱なものになってしまいます。多くの人が参加できる仕組みのもとで、結束力を高めていくという二段階で考えることも大切です。

「分ける」という方法論ではなく
いかに「混ぜる」かが
まちづくりには
重要です。

早稲田大学 副総長
後藤 春彦

水と人と夢がめぐるまちへ

司会▶最後に、裾野の未来に向けて一言ずつお願いします。

後藤▶裾野という地名、すなわち、富士山の裾野が伸びて駿河湾に向けてなだらかに下っていく地形のイメージが大切です。それを具現

化しているのが水です。それが裾野という表現の根幹に繋がっている気がします。駅西公園の親水広場のような、富士山から湧き出てくる水が裾野らしさの表現だと思います。

中川▶裾野には深良用水があって、その水を使ってお米を作っています。深良中学校では「いのちの用水」という演劇をやっていますね。

後藤▶「愛されるまちは人づくりから」とも言います。市外に出た子どもたちが戻ってきたいと思い、戻って来ることのできるまちであってほしいと思います。

土屋▶子どもたちが大きくなって「やっぱり裾野はいいな」と思って戻って来られるまち、たとえ戻れなくても「ふるさと裾野」を誇りに思えるまちにしたいです。

中川▶ 阿波おどりは駅前のにぎわいづくりにとても有効だと思います。参加する人や関わる人の間につながりが生まれます。イベントには市外の人も来てくれて、経済の活性化にもつながっていきます。みんなで育てていきたいですね。

市長▶持続可能なにぎわいをつくるには、「楽しかったね」で終わらせず、しっかり経済を回していくことが重要です。イベントをきっかけに「ここの商品はおいしい」「このお店はいいね」と感じてもらい、日常的に買ってもらえるようになる。そうした成功体験を持つ事業者を一人でも多く増やしていくことが、行政の役割だと思っています。そのために、地域の魅力ある商品を取りまとめて売り出す「地域商社」のような仕組みや、挑戦する人たちの資金面を支えるスタートアップ支援なども、これから真剣に考えていきたいと思います。財政非常事態宣言を乗り越えた裾野だからこそ、「歳入を増やす」ことにしっかり取り組む必要がありますし、中小企業や個人事業主の挑戦を後押しすることは、その大事な一歩になるはずです。夢をかなえたいと思う人たちを、応援できるような土壌を作っていきたいです。

新年の市長挨拶

人と企業に選ばれるまちを目指して

裾野市長　村田 悠

令和７年は「やりきる」をスローガンに掲げ、これまで積み重ねてきた市長戦略の完成とさらなる発展を目指して邁進してまいりました。

財政運営については、令和７年２月に「財政非常事態宣言」を解除することができました。今後も、中長期的な財政見通しを市民の皆様に丁寧にお示ししながら、持続可能な市政運営を着実に進めてまいります。

公園事業では、令和７年４月に駅西公園がオープンし、子どもから大人まで安心して過ごせる空間が生まれました。また、７月にはせせらぎ児童公園がリニューアルオープンしました。これらの公園は、多世代が交流する賑わいの拠点となり、まちの魅力を一層高めるものと確信しております。

子育て支援については、10月から子ども医療費の完全無償化を実施いたしました。市民の皆様が「裾野市で子育てをして本当に良かった」と実感していただけるよう、「日本一の子育て環境」の実現を目指し、今後も切れ目ない支援の充実に努めてまいります。

企業誘致については、積極的なトップセールスを行い、多くの企業に裾野市を選んでいただいております。さらに、９月には実証都市「トヨタ・ウーブン・シティ」の実証実験がスタートし、国内外から注目を集めています。本市としましても、周辺企業との連携を深めながら、明るい未来を創出するまちづくりを進めてまいります。

これまで、市民の皆様との対話を重ねながら、地域課題の解決に向けて一歩ずつ取り組みを進めてまいりました。「人と企業に選ばれるまち」の実現に向け、これからも「やりきる」の精神を胸に、市政のさらなる前進に努めてまいります。